竜丘時報

長野縣竜丘村一一番地
編輯兼發行人　久保田經男
發行所　青丘龍下會
發行者　長野貞雄
飯田町七三二
印刷所　縣社狗興印刷所
飯田町六三二
印刷人　長野縣松下義雄

初秋漫筆

暦を繰ればすでに秋に入る事十有余日。炎熱尚甚だしく殘暑のくらし難き日續くといえど朝に夕に、秋虫の音の繁く、清淨な大氣の流れ、新鮮な朝霧に包まれた山々の姿!!に秋色すでに浸みじみたるを知る。

動亂と不景氣と前途の暗雲とに等しく蒼白な顏を連ねて來た農村人に、本年初頭以來の浮れ景氣は、かすかながら愁眉を開かしめ、村にも町にも明るい色が、久しく見られなかつた氣力と氣勢とが流れ渡り更にインフレの變調子のあふりは絲價を繭價を鰻上りに上昇させて、氣早い無智な百性を、往年の好景氣來ると無性に有頂天にして了つた。然しながら秋風、色をます今日トン〳〵拍子の好景氣は夢と消へ―ギチリギチリと西とも東ともつかない景氣であり糸價も安定の高相場ではない眞の景氣は、眞の安心出來る世の中は、この狀態の延長に依つて斷じて來るものに非ざるを知る人は幾ばく

「拾つても拾つても穴のあいた繼子びくに栗のたまらぬ」古諺の如く、どこかに欠陷のある世の中は、それがなほらない限り全國民の大部分の生活も何もかも安らかでない。

「豐葦原瑞穗の國に生れ來て飯が食へないとは……云々」の如く農業國日本の農民が、陛下の大みたから、と呼ばれる農民が何時迄も暗黑の中にもがく今日の日本に、眞の日本の姿が、皇道が生きてゐづ行はれてゐない事が判る。

一人も早く目覺むべき處はこゝ。

今法廷で叫ぶ五・一五事件の陸海軍人の聲を一言も聽きもらしてはならない。

愈々本年たゞ尾の秋蠶に入る研究に研究は生命線だけに各自よく行はれて居り、その緊張は物凄いばかり。

上成績で飼育する事は勿論第一ながら、絲價の風船玉の樣な落つきのなさに、萬善の對策はないものかと、この研究も重要。

今、產業組合の發達は、生糸聯合會の活躍により、一二少數權力者の手中にまるめられる点が大部少い樣であるが、是を達成して何ももらさぬ堅陣を作る必要があらう。

小數資本の力に屈服して、拔き賣りや特約組合への加入、產組脫退等の現れは個人主義的無智な農民の姿を遺憾なく現はしてゐるものだ、絲聯等の力の團結が第一と同時にもつと大きく、國家の手で生絲の販賣統制をやる樣に努力する事が第一であらう。

すべての重要產業の統制と共に、そして大きなこの力でしつかり腰をすえて了ふ事だ。

農人が農人の、生活を村々をもつと開拓して行くべきは勿論刻下の急で、再らに大きく國民全体の爲に健鬪努力すべき使命が前途に大きく待つてゐる。人としての尊い使命が人間生活の至高の峰を明示して進むべく躍つてゐる。把握するもの、開き行くものゝみ知る彼岸……は足もとから展開してゐる。

然も最も若き青年大衆の眼前に多く。

青年團のねごと

A

下平生

青年團と補助金

縣聯青が八〇〇圓の補助金を貰つて、体育部復活とかで、「補助金と自主化」でさかんに論議されてゐる、が本村青も村當局から補助を頂いてゐる。

自主的青年團の理想としては補助金など貰わないで本來の使命を全うすべきではあるが而し村青と自治体とは歴史的にも種々な方面からも對立的な存在でなく、有機的關係にあるもので貰つた補助金が自治体のために、又社會のために意義ある仕事を成すべく努力する爲にこれを中心にどう云ふ感情もおこらないのは村青の特異性とするところで縣青とは其性質を異にするものであるからだ。

青年團は經濟的團体ではなく次代社會の建設者とし國民的自覺の下に青年團本來の使命を認識し、よりよき社會實現のために働くもので、經費の多くをこれに費すべく金を取ると云ふ事より使ふことの方が多い團体である故に此の金をより効果的に生かすことに絶えず努力するのである。

青年會と自主化

青年會は單なる社交幾關としての偏重的觀念所謂昔の若衆連の寄合の延長の如きものではない。

社會は不斷に進歩してゐる。青年會も絶ず進歩の軌道を走つてゐる。

一部の急進的意識的分子を先頭に抽象的な公式的な目的を掲げ青年大衆を動員せようとすることは自主的とわ云えぬ各會員が社會的認識を把握し已の社會的行動を決しようとする自主的な意志があらば、それ自主ではなからうか。

青年としての使命をはつきりと認識して、それをなし遂けるところの勇氣と信念を其つ所の教養によつて、盛り上つて來る、がつちりとした團結の力に充ちてこそ自主化の姿ではなきか。

その姿こそ明日の農村を背負きる勇姿ともならう。

神の起因

天地の事（三）

小林安太郎

敬神、修理固成の事

是に天神諸々の命を以て伊邪那岐命、伊邪那美命二柱の神に是の多陀用幣流國を修り理め固め成せと詔て天の沼矛を賜き言依賜也

仰き來て諸越人も住着くや實に日の本の光りなるらん。

之は古事記の御文面に載せられたる道遙院内大臣實隆公の御歌で歌の意は日本は神國に相違ない。天神の御正統が萬古不易に坐す有難い國で外國人迄も住着く樣になる。是が實に日本の光であると云ふ歌で先づ古事記の天地初發の有狀を申せば、世界が未だ始まらぬ前天地もなく日月も人もない最初から別天神と申して格別に尊く妙なる神が居らして御名を天之御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神、可美芦牙彦遲神天の常立神と申奉て五柱坐て此五柱の神は別して有難く妙なる神なるが故に別天ツ神と申してあります。

此神は奇びに妙なる靈德に因て何もない、大虛空の中に氣象混沌と申して天氣と諸の物質となるべき地體とが入り混つた一物が出來ました。此一物が段々成長するに隨て其氣と象とが離れて二つになりまする。其時靈妙なる氣は上へ上へと輕く澄み上て天上に位を定め体質は下へ下へと重く堅まつて一の圓体となり地球の位に定まりました。

これが先づざつと天地の荒取が出來たので實にこの時は天地の草稿と云ふ迄の事で地球となるべき一の圓体は、油や水月を見たように浮漂ひ、何かなしに轉々と廻つて居りました。然るに造化の主宰と坐す皇祖天神の元氣が發動するに付いて國の常立神豐斟渟神浮泥邏神、沙土邏神、角材神活材神、大戸乃智神、面足神カシコネ神などの神々が次第に御出現なされ大地も追々と締りが付て上に浮むべきものは浮泥となり下に沈むべきものは沙土となり。漸く沙土、水、陸の狀が出來夫から國土の面なども足備し驚きカシまるゝ程になりますると終に人間の始祖と坐す伊邪諾命、伊邪冊命雌雄二柱の神が御出なさりました。既に前にも申した通り七は萬物變化の數なる故に國の常立神より丁度七代目に人間の始祖が御出現なされたでござる。今も子が生れますと七日目七日目に祝を致します。又死だときも七日目七日目に祭を致し又藥なども七日分を以て一廻と致し、月經なども七日目に収り、病も大低七日を以て重い輕いが分る。そこで支那でも正月七日を人日とて祝ひ西洋でも上帝が七日目に亞坦と云ふ人間の祖を造つたと申してあるは實に神代の古實にかなつた神蹟でありまする、この時皇祖天神は始祖に神に天之ぬ矛を御授けなされ、此矛を國土の柱地球の鎭と衝立て彼の漂る國を修り理め固め成せと仰られたでありまする。斯樣に仰られたる皇祖の御神慮を人情に移して申て見れば漂ひ廻れる國土を立派に修り成し、其國土に人類反萬物を生殖し我愛子愛孫として正統を傳えたる天子に其人類を附屬せしめ、天壤無窮と限りなく奉公致させ正統の天子は申すに及ばず附屬致し居る億兆の民も共々に長く榮え樂みて、朕が神慮を喜ばせて呉れよ此事呉々も賴むよぞとの實に遠大悠久な生を受たらんものは貴賤賢愚强弱男女の別なく、其程々に隨て心を勞するとか、力を勞するとか大小何れ其身の分限に隨て國家の富を計り人民を益する等各苦辛勉强せねばならぬと云ふことにて人々に備るべき性情の元素元因となつて我惟神の大道又社會の根本なる神語にして、一日も忘却致すまじき萬古不拔の大訓でありまする。

さて始祖二神は天の浮橋に立玉ひ彼漂ひ廻れる泥海に其天之ぬ矛を指下しコヲロ〳〵と搔回し玉へばその勢に引かれてエレキの力を引起し鹽氣硫黃明礬鹵砂などが和合して一つの島となりました。是が所謂自凝島で始祖は其島において天之ぬ矛を天の御柱に准へて國の御柱と衝立て又八尋殿を化立て男女結婚の道を示し夫より國々島々を生し、五元の神靈風、火、金、水、土の神靈を生じて皇祖天神の造化の功用を助けしめ天地成就すべき大基本を立玉ふたのでありまする。是が天地世界成立の始人間社會に於し衛生產業の道の生したる源頭でありまする。

さて始祖二神大に皇祖天神の造化を助成し玉ひ修理固成の大功德成就して、雄神は皇祖天神の御許に復命して天靈とならせ玉ふたのでありまする。此天地の二靈とならせ玉ふ迄御艱難御辛苦は容易ならぬ事で、天地の成立世界の創造なる御心と萬苦の御實行は申すも中々恐れ入た次第であります。始祖は斯の如く千變萬化の中に立せられて御勤勞遊ばされたるは、何の爲ぞと深く尋ね奉れば上は皇祖天神の勅命に從はせ玉ひ、下は萬民幸福の道を開かせ玉ふ御心盡にして申すも中々恐れ入りたる次第で人は皇靈の神の德に因て世に生れ始祖二神の御恩賴に依て立命安心することなれば修理固成の神語を深く体認し、始祖の艱難辛苦して後世を御助け下されたる御仁德に神習ひ奉り、壯年には其人に備りたる事業を勉勵し晩年には固有の本性を識得して其光を揚げ、死後には神の御許に復命致し、大にしては恐れながら御寶祚萬々歳國体安全を守り奉り、小にしては朋友の幸福、子孫の繁榮をも幸はへ惠むようにと日常精神を確に固め成すべきことであります。

（續く）

公告

本紙九月號休刊

愈々本年たゞ尾の秋蠶をひかえ本紙九月號は丁度その發行日が、秋蠶の繁忙期故、編纂部員も大多忙に就き一回休刊し十月に入つて再び活躍することゝ致します。右おしらせ迄。

原稿募集

次號は十月。

愈々秋燈下親しむの頃を迎ふ身心自ら碧空に向いて緊張、田野は秋の、みのりに黃ばみ工場の窓に秋風爽かに充ちて心條透む。

日常の生活記錄を募集します

「秋色生活風景」の題下に、鎌をにぎる手から、桑を摘む中から。操糸の生活から、とに角斷片的な短文でいゝ大勢の稿をお願致します。

「若人の論壇」を今後賑かに充實したい。是も斷片短語でいゝ、一議論を投ぜられたし

「丘の文藝」文藝方面影もない、今迄秋の詩情を發表されたし、詩短歌、俳句、民童、謠等

「生活の經驗、体驗實記」

農業經營の方法から細かくは一、養鶏、養兎、養蜂、養豚等の研究實記等

稻、野菜類、蠶等々の實記

其の他何でも思いついたものを書いて編輯部へ送つて頂きたい。編纂部員は各區青年會處女會で四、五名は居ります。

青年天幕講習會

本村青訓生も參加

去る八月十八日より三日間鼎村妙琴原において縣社會課主催のもとに青年天幕講習會開催さる。集ふ青訓生一千名主に三、四年次にして郡下はもとより遠くは西筑、東筑摩、安曇、諏訪、上伊那南部より熱心なる青訓有り本村においては二、三、四年次三十五名出席受講する。

天幕及び炊事用具一切は松本聯隊より借入れ聯隊よりは菅原少佐、杉山一等主計等の來會を見其の他第十四師團留守隊長の參會が有り飯商小笠原大尉指導の元に集合解散に至る一切軍隊式生活に於いて行ふ。

修養講習は古賀學務部長、坂田社會課長、彌富教育主事、岡田主事補、中原謹司氏等の出席を見て青年教育としては峽谷始まつて以來の盛大なる講習會で有つた。

新開地門島

高嶋和男

滿天下に絶景として稱へられたる天龍峽驛より一路南方へ走る三信電鐵、隧道より隧道へ乘客には都會に於ける地下鐵の感を抱かせ、眼下の清流綠岳を眺めてスイスの風景畫を忍ばしめ、谷に出ずれば高架鐵道も斯く如きかと田舍人には想像の念を起さしめ、驛に出れば登山鐵道中部驛の姿も斯くやと千種萬別の念を抱きつゝ二里新開地門島驛に着く。

驛を下れば白木の香り高き小家屋櫛比を見、一歩歩ゆまば此の山上の如き此の驛に驚き又一歩歩ゆまば谷の如き傾斜地を河原へと續く、トロ線路に又一驚する。

何を運び下すかは知らざれども、此れに從事する人夫の技術、頑丈なる体格振りを想像しつゝ附近に人無きを殘念に想い工事場へ、否工事場の一見し得る地へと急ぐ。

一歩二歩石コロ道を草をわけつゝ登ること約二十分、きが付けば古龍東線縣道は通行を禁止し、新たに六十度傾斜の山腹へ切り開きて旅人を危險地域より回避通行道なりぬ一丁二丁又登りてさしもの若き健脚師も疲れて、杖を立つところ其處は回避道最高所にして工事場の一見出來得るところ、清水流るゝ綠陰なりぬ

見下せば足下千尋の底に岩を咬みて走る急流天龍川の又急流一名大瀧と言はれ、客船の下る折においては客を下船せしむると言ふ難所の白煙を見、波の音機械の音、人聲爆藥の響を聞きつゝ、眼を四方に轉ずれば、彼岸山上にはコンクリート攪拌機有り、一線二線六線よりなる索道有り登り行くモッコ、下り來るモッコはセメントを砂を砂利を運び去り運び付く。

折から足下に起る爆音立ち登る白煙、一つ二つ三つ四つ岩石を割れる響、されども其の姿は如何に座臥すれども見えず。同時に動き出すトロッコは川岸をゴウ〳〵と上へ下へ、一橋二橋！　六橋の上を對岸へ―それにともなつて働く人夫蟻の如く見ゆれども赤銅色に染まつた体軀により玄海灘を渡り來た兄さんで有る事を知る。又其の間をステッキにワイシャツ姿の監督が西に東に歩む、走る。

蒸氣船の走るが如き音を立てゝ廻轉する製鐵機、三十間も有るかと思はれる櫓。何を行ふのか二人の人夫が猿の曲藝の如く上へ下へ時には這ふ樣に手を上へ下へ左右に振る。振り上げる鍬、打ち下ろす鍬川底を堀る人夫のツルハシも心地良く揃へば、兩岸の綠陰には小鳥が鳴きキリギリスが此れに合唱し唯々茫然と見入るのみ。

白き急流にぱつと立昇つた水煙に胸を打たれ、眼を對岸の崖を上へ〳〵と向け、コンクリート攪拌機の下部崖の中腹において心眼迄も開かなければ見定め難き人夫七八名を見る。

蟬が木にとまつた如く岩石を土を堀り落して居る「命知らず」思はず叫んだ友の大聲に驚く。

ドカン〳〵飛ぶ岩石、川中に散る飛沫、木立に立ち昇る白煙、走り廻る赤銅色の人夫滿洲における戰場の光景を想い起しつゝ新都市門島の町を見るべく工事場を辭し石ころ道を驛の方面へ下る。

昔は門島狢の巣でも

今ぢや阿南の首府となる町に下り立ちて見れば何處からともなく子供の歌ふ阿南小唄の一節を聞きて、小唄流行時代の餘波は新開地の子供の胸までも染めたるのかと悲哀を感じさせらる。

折柄工事監督小屋に十一時の柱時計の鳴る音を聞き、ゾロ〳〵と飯場へと急ぐ人夫のすがた、朝鮮婦人の買物歸へり、食事の準備すがたを此處彼處の木蔭橋の下に見つゝ川を渡りて一歩町に入る。

白木の香る町門島、阿南の名も無き村落にも今は理髮屋洋服屋、玉突場、諸醫師ありレコード代理店あり、過半數もあるかと思はれる料理屋、一寸一ぱい屋、カフェー亦美くしく立並んだ居宅に一驚しつゝ又川畔へと戻る。

其處に此處に山と積み上げられたる丸木の上、投げ出されたるトロ箱の中、岩石の間に、川原いたるところにおいて午睡の夢まどらかなる人夫のすがたを見る。白木のバラックが水に反映し人夫の眠る樣等全く關東震災の寫眞を想い起す、この一時間乃至三十分が日中における唯一の樂しき自已の身体の自由の出來得る寸暇オアシスならん。小兒の喜々として水にたはむるすがたも三々五々川畔に見出される。

一千五百の土工は終日勞苦に耐へ始めて與へられたる夜間の自由如何ほど樂しく思ふことか、されども良民は非常に恐れおびゆる。彼等とて人間である以上慈愛を以つて迎へれば優しくなり忌避すれば反感を抱くのは當前のことである。仕事を好まぬ不良土工が時折入り來る、これに警戒すればと茶店の老母の話しであつた。

二時間毎の電車によつてこの峽に名殘りを惜みつゝ歸途につく、未だ天龍の急流は過古のまゝに流れてゐる「一度見ぬも馬鹿二度見るも馬鹿」現在の所では未だこんな感じが起らないでもない。工事の進行を餘想すれば明春開櫻期頃になればこの急流を堰止めにかゝるであらうか。「僧兵と加茂川の水は自由にならない」といつた昔を思へば現代文明の發達に凡人なるが故に唯々驚嘆するのみ。

今や隧道へ向つて發車せんとする車中、友は

昔忍んだ門島村落

今ぢや白木の都市となる

と伊那節句調の小唄を一首

昔は名も無き門島河原
煙もほこりも無き都

新鮮な空氣の中に立つ町門島山又山に圍まれたる白木の町門島の風景を思いて我も一首

門島小唄の急作を行ふ

電車は走る種々雜多なる人物を乘せて光明の世界より暗黑の世界へ、暗黑より光明の世界へ。北へ―北へ――。

（八・二一日記）

◎印刷者は原稿に渡島と記しあるも門島と印刷す

縣實地指導竜丘村桑園、夏作綠肥播種及收獲

播種…五月二十日、品種…黑干石、播種量…反當三升八合

▲方法　アゼ間を淺く耕耘しつゝ平坦となし淺き溝を堀りその中央に木炭を入れ薄く覆土したる上に播種する、間に一回の土寄せを行ふ

▲收穫　七月二十日

桑園名	反當收量
島ノ内桑園	三三四貫四〇〇
扶桑丸	三五一、〇〇〇
稚蠶	四〇〇、〇〇〇
見本	三四六、五〇〇

▲綠肥鋤込　鋤込は拔き取りて一、二日乾かして（實際には直ぐ鋤込む）生草一〇〇瓩に石灰五瓩の割合に撒布して土を被ふ

社會時評

○

▼郡青年會再建に就いて

此頃新聞紙上に散見するところの下伊那郡青年會再建運動は一体どの程度迄行動化されつゝあるか、亦その目標イデオロギーは如何なるものを持ち打立てゝ行かんとするのかそれ等の点悉知する處ではないが、兎に角再建運動の人々が特別變つた方面の、人々で新生命の波打つ新興團体ならいざ知らず奥村委員長産組青年と化して後四分五裂を極めた昨秋のあの殘留組が往年の郡青を再燃さすが如き考の下に起した運動であるなれば、先づ以てくだらない事である松尾、上飯田、伊賀良、上郷の四ヶ村が郡青脱退の狼火を上げて、中央部青年會を結成した仕事は大出來だつたがその脱退の原因、根本をなすものが問題にならない稚氣に等しい事であつた爲と、更らに組織後の中央部青年會幹部が新興青年運動に對する認識不足の後、騒々しい珍妙な分裂劇を一幕演じたにすぎないナンセンスで終りをつげて、以來殘留郡青組も、共々に解消して果てた。要するに現社會に立遲れた綜合青年團のその分家が一時華々しく店開きをしたが、時流相扼し難く、本家分家共に倒れた一幕物であつた昨年。

○

再びこゝに郡青再建のくだらなさを思ふものである。

是に龍丘が參加してゐるとかのとんだデマを報導してゐる新聞があるとか、少くとも僕の考へる所ではそんな余興氣分は龍丘青年持合てゐないと信ずる。

郡青の一枚看板、微の生えた自主化運動とインチキ左翼流の言辭行動が今日すでに葬り去られた問題である事を、再建の意氣に燃ゆる諸君に注言して置く。

忘るなる

九月一日

第十回　全國一齊　酒なし日

關東大震災の記念日九月一日を期して行はれる全國一せい酒なし日運動はいよ〳〵今年で第十回を重ねることゝなり折柄聯盟脱退後の重大時局に處すべき非常時國民運動として年十五億の消耗を防止すべく官民各方面において具体的實施に入らんとしつゝある際とて大いに緊張發奮を必要とする、元來この運動は嚴正禁酒の强制を目標とするものではなくて謹慎反省の意を何等かの形であらはしたい國民的感情をたとへ一日だけとはいへ酒なし生活に表現し心靜かに横死同胞の冥福を祈ると共に將來への發展の門出たらしめんとするにある、因に本村においては年々一般へ通知を發してこれを省しつゝあり今年もこれに參加し村一般大衆の奮起を待つといふ

△△△△△
△△△△△

第十回　酒なし日趣旨

▽▽▽▽▽
▽▽▽▽▽

九月一日關東大震災の記念日に當り横死同胞の冥福を祈り國民的反省發奮の實を擧ぐるためこの日を酒なし日と定め一日約四百萬圓を費しつゝある酒類の飲用をつゝしみ以つて經濟生活の更生と民心の作興に資するところあらんとす

今や我が國は聯盟離脱後の重大時局に際會し國をあげて緊張奮勵を要する秋、克己日の制定による艱難堅忍の修養の重要され居る際なればすでに九回實施して成績すこぶる良好なるところの酒なし日をこゝに一層の熱誠を以つて擧行せんとする次第なり

雙及劍

炎帝日に增し、遠のくといえど、灼熱未だ去らず。燃ゆる地上に、汗の生活は續く。

□

愈々八年度最後の決戰、秋蠶發生す。賴みの綱はこゝにかゝつて、緊張亦緊張。

□

公課は高い、物價は騰る、負債は迫る、鬪ひ拔かんとする農民の眼、顏色。

□

全人口の七割を占める農民が浮ばれず、皇道日本は暗である。

□

五・一五の陸海軍人、民間人が、等しく憂國の熱涙をふるつて叫ぶ所、混沌暗き國家を思ひて、胸をうつもの、湧き返るもの。

□

國民全体が、皇道日本の哲理の下に、暗黑より光明の中に甦るは何時。

□

資本の牙城、製絲特約組合の猛威、産業組合を荒し荒さんとす。

□

産業組合の普及發達した所はぴくともせぬが、さて、まだ〳〵オイチニの組があつて。

□

くずれ立つ情けなさ、無智な農民の悲しさ、若き第二の農人達よ、起て！。

□

郡青再建の聲、どこぞで聞こゆないと寂しいと見える。

□

あつても價値の上らぬ、うどの大木。まして錄なものが出來もせまいに。惡い事は云はぬ、おやめなせえ。

□

稻の穗出初め、秋、近きにあり。

丘の青年處女尚武會の軍人慰問袋發送

今年の始め頃から饅のぼりに上つて來た生糸相場は春蠶の出盛り期をひかへていよ〳〵爆發高を演じ、この頃絲價の足並に狂ひが來て崩れ落ちたがとんとおかまひなく景氣到來！浮いた〳〵の安逸な日を送つてゐて小さな滿洲の新聞記事より甲子園の「中京對平安の決勝戰」なんて記事に熱狂してゐた吾等こゝに目覺めて、滿洲の土に草に這ひ土にまみれて折々でつくはす彈も糞喰へと命を抛つて奮闘の兄弟、なほ海に陸に奮闘の吾等國民の志士軍人二十名の勞を慰めんと尚武會では八月二十一日發送、青年會處女會では八月二十日夜發送準備九月早々發送する。品は少なくとも純情青年處女の眞心をうんと詰めこんだ慰問袋である、必ずや歡聲を上げてわんさ〳〵と踊つてくれることであらうと思ふ。青年處女會發送の品は木下紫水先生圖案の龍峽小唄の手拭、森永のキャラメル二箱、用箋一冊、めざまし一袋、靴下一足で一人當五十錢見當である。慰問金は青年會では教育部から十圓出金、處女會では集めて總金六圓十五錢と葉書二枚である。尚慰問狀を青年、處女會から募集したかつたのだが日がなく男女青年會教育部員が一人一通づゝ書くことにした、村の情報と慰めの言葉を滿載して。故郷からの便りを鶴首して待つてゐることであらうから。丘の青年、處女よ！どし〳〵便りの雨を降らせるべしだ。

農村經濟更生計畫に依る技術員講習會に木村氏御牧ヶ原へ行く

沈滯した農村の灰色の空氣を破つて華やかに登場したのは昨年の末頃である。生産及消費の無統制と無計劃とを以つて終始した農村の經濟をこの劃期的な更生計劃によつて統制づけ組織化さうといふ聲がたちまち全國の農村にひろまつて、すでに昨年中にこれを樹立した縣下百餘の町村にとつては今年こそはその實行の第一年目である。更生計劃の夏は技術員からこて八月十九日から二十八日まで十日間御牧ヶ原にて技術員講習會が開かれ本村からは木村技術員が出張した。

徴兵檢査結果

…行施日八十二月七…

本年度徴兵檢査は七月二十八日聯合事務所で行はれ成績も相當良好であつた、檢査を受ける者六十五名、内甲種合格十三名、第一乙種合格六名、第二乙種合格十九名、丙種合格二十一名で尚丁種六名である左に甲種合格者を示せば

伊原利一、橋爪文男、長沼保治、伊東茂一、中島操、牧内美壽、下平松雄、牧内正美、下平多太郎、木下光男、池田忠一、森哲、今村文一

技競の夏眞

×水泳大會で時又青年會で

時又青年會は盆の十五日を利用して龍江第一區青年會と水泳大會を開催したが當日は薄曇無風の絶好のコンデーションで皆元氣よく一日中泳ぎ廻つた、なほ對抗競技の得點は左の通りで惜しい所で覇權を龍江に讓つた

	時又	龍江
自由50	3	3
仝100	3	3
仝400	4	2
背泳20	3	3
平泳50	3	3
リレー400	0	3
計	16	17

青年會●處女會消息

「天龍下れば」

盆の十五日龍青體育部の催し

龍丘青年會体育部の事業としてこゝ數年行なつてゐる時又から天龍峽までの天龍遊船は本年も十五日に行ふ、最も壯快にして涼味百％のため年ゝ共に參加者多く本年も六十名ほどにて舟二隻を仕立てゝ午後三時出船「天龍下ればしぶきにぬれる」の唄の通り飛沫にぬれて波を乘り切り天龍峽龍角峰下に着船それより天龍峽ホテルに到り茶菓が出て夕景解散した

竹林施肥

上川路青年會大努力

上川路青年會が經營する模範的な事業經營の一つ竹林については非常な努力をはらつて今日好成績を示してゐるが今夏これが竹林に施肥を共同勞作で行ひ一層造林に拍車をかけてゐる

トマトソース講習會

駄科處女會の催し

駄科處女會では去る八月十七日午前八時より村社諏訪神社境内森の緑蔭でトマトソース作り方講習會を開催した、講師としては別になく先に習得した前會員や會員中で研究し合つて行ひみつしり習へた由

桐林青年會のキャンプ

去る十七日夜桐林青年會員十一名は鼎村妙琴原風景明媚環境幽邃なる地においてキャンプを行つた、潑溂たる若き青年の意氣に原頭一帶の草木も靡いた事ならん

風越峽キャンプ

駄科上川路青年會の催し

キャンプ〳〵の流行の夏。キャンプ界の寵兒風越峽へ各方面からおしかける、駄科青年會体育部主催で十七日、上川路青年會でも同日行つた

生絲組合全休を行ふ

秋蠶繁忙期にて乙女群蠶飼の生活へ

—各方面大喜び

龍丘生絲組合においては原料薄の關係並に秋蠶飼育上における勞力關係とにより役員會開催の結果九月二、三日頃より十七、八日ころまで休業と決定從つて全從業員が或ひは自家庭に歸り手傳ひをなし或ひは各方面へ養蠶に働きに出て一せいにこの期間内蠶飼ふ乙女となるが、この報組合より一般組合員に通知あるや養蠶手傳ひの申込み殺到してたちまち充滿、時節柄この期の休業は勞力に非常の緩和を來し一般に喜ばれてゐる

長野原青年會の夜間行軍

八月二十一日納涼がてらに夜行軍を行ふ——。元來當青年會の年中行事の一つとして必ず行はれるものだ、上郷村見晴山に到り小休止不幸雨に會いたるも元氣旺盛で飯田に出で「飯田をどり」を見て午前二時に歸る、時間に制限のない行軍は又格別おもしろい

灯ど人の波の時又驛頭

カルピス賣店の賑ひ

—竜丘處女會進出—

去る二十三日燈籠流しの當夜龍丘處女會が涼客あふれる時又驛頭、天龍下り乘客休憩所に進出陣取つてカルピスの賣店を開業したことはすでに悉知のことであるが、夏の夜に適したカルピスの提供で大好評を博し大繁昌を呈した、時又驛から街へかけて空を縦横に張りまはされた電燈と道路の兩側に點ぜられた燈籠とに赤に黄に白に照らし出されたその下を各方面から殺到した燈籠流し見物の涼客が波の如く押し合つて灯の海人の波は五彩のどよめきに夜の更くるを知らず、その中を盆踊りの大きな輪と大鼓の音が入り交れ空前の大賑ひの時又驛頭に白エプロンすがたの處女會員龍丘ミスのかんばせいとも朗かに大奮發のサービスぶりを發揮し、稲丘ミルガー一本金十五錢、カルピス一杯金五錢也のお客をさかんに送り込んでは吐きだす。味もよく人いきれにかはいた咽喉をうるほして好評々々でエプロンミスの轉手古舞のいそがしさを呈したやうである。細かく調べて書きたいは新聞人の通癖ながらこゝではその賣上高は書かぬが花と、やめて置くが當夜の一異彩として涼客に十分の満足を與へた。

竜丘生絲組合便り

春繭受入高とその平均絲量は

白　五六三一貫五二〇匁
　　絲量一二掛九分二厘
黄　三四七四四貫二四〇匁
　　絲量一二掛　一厘

夏蠶受入高

本年度夏蠶は各所に違蠶の聲を聞きために供繭量も豫想より少かつた由だがそれでも相當の供繭は見て白八五〇〇貫

七月中生糸黄、二十一中絲聯より受けた配分代價

A格三千斤、配分單價八百七十八圓六十四錢
B格五千斤、同八百六十八圓六十四錢
C格一千斤、同八百五十八圓六十四錢

夏秋蠶種代協定さる

龍丘生絲組合扱のもの

本村生糸組合においては夏秋蠶種代の協定會を二十二日開催出席者は調査員、實行組合長と相手方指定蠶種家とで結果全部委託製造によるものとして日支母体共に夏蠶一グラム金十錢、秋蠶一グラム金九錢五厘と協定さる、但し秋蠶にかぎり日七號×支一〇六號、は一錢五厘高と決定した

生菓子・斤菓子
菓子形・其の他
▼▼新らしくておいしいのが自慢
▼▼値の安いのがモットー
時又　藤屋菓子店
電話十七番扱

洋品
小間物
化粧品一切
秋は近し
秋への洋品
小間物類
お好みの化粧品
時又
吉川屋洋品店

竜丘消防第一部不時呼集

夕暗次第に濃くなる十八日午後七時頃第一部の警鐘が鳴り響いて不時呼集が行はれた、三ケ年無火災表彰を去る十六日に緊張裡に了へた直後のことであり第一着が打鐘後二分全員整列の時が八分の短時間でなし了へ服装もよくそろつてゐた、無火災の域に到達した報告や挨拶その他二、三の報告注意があつて一時間にして解散す

賣特付品景キンイトイラ
すまし致もえか詰のキンイ
二オンス・十五錢
時又港　新生堂書店

惠那山に登るの記（二）

合作　小林讓生　女訓MT生

頂上小屋＝不動瀧

たつた一夜だつたが安らかに眠らしてくれた山小屋へ、沈默の禮と別れを告げた私達は背のリュックサックの重みも足の痛みもすべてを忘れて輕やかな歩調で歸途についた。昨夜の雨に一層綠を濃くした高山植物の茂つた道を分けて今はぼがらかな一列隊は下つて行く。

赤き花匂ふユウラクの葉蔭より栗鼠とび出でて我は驚く（T）

○

熊笹の茂みの中を下りければ俠霧の中に駒鳥の鳴く名匠に筆持たせたし此の景色さ霧に浮ぶ笹山の景（仝）

……○……

「おれ、まだ三十代だぜえ」定五郎のユーモアにどつと歡聲を上げる。枯れるかも知れないと思ひながら、道端の草を登山の記念に手折つて土產に持ち添えたりした。足元の草に亦仰ぎ見る裸木の疎林。風雨にさらされた巨岩―「スケッチでも歌でも俳句でも」何でも良い。此大自然の惹きつける力をもう少し禮讃し表現して見度いと強く感じる山の豪壯な風物は平地のみに生活した私達にとつて唯驚異であり歸り難い執着でもあつた一歩一歩が山を離れやうとし乍ら今一度降りて來た道を振回らせる、惠那山の持つ强い魅力よ！絶えず白樺の林を通して來るそよ風に山の匂ひを感じる。小鳥がぼがらかに囀つてゐた。途中でサッサッサラーと水の音…「瀧に來た？」「不動の瀧は」と意氣旺盛の餘り皆の歩調が早くなつた。「早すぎるよ」「ゆつくり歩いてるよ、川があるよ」などゝ先頭と殿との問答が裸木に落葉樹にこだまして響く。薄くかゝつてゐた朝霧もすつかり晴れて、向ふの峰が南畵の繪でも見るやうに靜かに見え出した。熊笹と枯木と巨岩と岩間から落ちる水と、形容詞の無い數々は秋達の頭一ぱいに殘つた美しさだつた。

「地獄二丁目」「注意」の文字通り、道でないやうな道を歩く私達は膽をヒヤ〳〵さしたフト河端に下りやうとした時崩れた炭燒き小屋を發見した「中に情死々体がある」

「私の昔の別莊がこんなに」などゝ、見すてられた其の小屋にユーモアな言葉があびせられた。

岩の上に立ち亦上に斷崖を仰ぐ山路をたどりつゝ蛇の出るやうなクサムラを渡つて漸く不動の瀧に着いたのだ。

山にかくされた不動の瀧を見て好奇と安息のため憩をとつてながめ入つた。人間の立入ることの許されない自然のみの神秘境とでもいふのか――見つめてゐてゾッとするやうな冷氣と物凄さとを身に心に感じた。不動の瀧の流れは不動川となつてゐる、私達はその川瀨を「わらぢ」をぬらして歩いた。

大きな岩の一面に記された歌は何處の誰が詠んだやら。

「おくゆかし不動のしづく身に受けてのぼる乙女子心淸らか」

不動瀧＝本谷

十時二十五分瀧を發して大分平易な道をたどつて下る、石も大分角が取れて大分里に近付いたことを思はせる。時たま來る降雨に行先を氣使ひつゝ飛び降り飛び渡り單調な深山に時ならぬ乙女の花が咲き亂れ花にたはむれる蝶々のやうだ。

所々に讀人知らずの歌があつた、大きな岩の面に中々の達筆だ。その一つに

去年來て育てし戀の花片は今は儚き幻と消ゆ

そうこうするうちに製板まで來た、前より少し下流ではあるが非常に大きい、其處からは非常に良い道路で全員かたまつて歩ける。しばらくして宿屋を過ぎ二時半には本谷に着いちやつた、用意してくれた食事を取つて午後三時半先生方に禮をいふて一路歸路につく。うねつた途も樂に通る皆元氣なので文句もない、六時には駒場着直ちに自動車で大瀨木まで、そこから又徒歩で三日市場を通り疲れた足を引きづり〳〵午後十時には家に着いた。

最初の事なのに、良く苦に堪へて、終始元氣一ぱいに行動したのは賞讃に價する。この分ならばいづれの高山に向ふも敢て恐るゝに足らんと確心するものである。

この行は女訓史上に永遠に輝ひて長くその光を放つだらう。

八・七・一八

赤陽滿洲に矛を執り線路を守る

中平志げる

獨立守備隊の話

昭和六年九月十八日滿洲事變突發以前までは獨立守備隊といふものが在ることすら日本內地では知らぬ人が多かつたといふ事で、從つてその任務や內情については一般に知られてゐないと思ひ玆に丘の皆樣にその大要を話さんと拙稿を書かして戴きます。

□

故國を遠く離れて氣候、風土、人情、風俗すべての異る海外の他鄉に帝國陸軍の威武を輝かすべく男々しく活躍する守備隊員は如何なる覺悟を以て御奉公をしつゝあるか。

過ぎし日露の戰において十幾萬の英靈と十幾億の國帑とを犧牲とし、三國干涉の義憤を晴らし獲得せし至貴至重の記念たる南滿洲における鐵道を守備するものにしてその使命たるや平時においては大陸における我國の發展上又有事に際しては我國軍の運用上唯一の大動派にしてその運行の安否は直に國軍の將來に關係する處甚大なり。

抑々獨立守備隊は南滿洲に在る鐵道線路とこれに沿ふ附屬地通信設備及び鐵道運行に要する施設を守備し併せて在滿邦人の生命財產の保護に任じてゐたが、現在では遠く北滿に延び列車の運行する處必ず守備兵ありといふほど重要視されてゐるのである。

統卒は獨立守備隊司令官これをし關東軍司令官の隷下に在り、入營は內地（本洲）から初年兵として直接各守備隊に入り滿二ヶ年間服務して滿洲で除隊することになつてゐる入營は十二月二日と六月二日と年二回で第一期教育は一般歩兵の教育以外に守備勤務にかんする教育を行ふから從つて普通の歩兵よりも教育期間は一ヶ月近く多くの時日を要するので相當教育には骨が折れるが、一般に教育程度が高く（中等學校卒業者）且つ周圍の關係と勤務がすべて實戰的であるために教育上都合のよいことが多い、即ち今日の教育が今日直に結果となつて現はれるのである。又仕事は實際の賊を相手にするので眞劍味があふれてゐるためで支那人等は守備隊のマークのついた襟章を附着した兵を怖がつてゐるのも、れがためである獨立守備隊は日露戰爭後ポーツマス條約追加約款によつて出來たもので、始めは小隊長以下は現役豫後備役の志願者を以て充されてゐたが大正六年から全員現役者を以つて編成されるやうになつたのである、條約上の駐兵權によれば一粁に十五人の兵は置き得るのである。

滿鐵線○○○○粁にたいして○○○○人を鐵道沿線に駐屯せしめ得る權利があるが、從來は駐さつ師團を合しても其數に達し得ない有樣であつたが、今年の十二月より十八個大隊といふ現在數の三倍の守備隊が增設されるのである。

我が十四師團の松本五十聯隊は奉山線を守備するとかの話も耳にして居るが確なことはわかつて居ない。

事變以來特に被害續發して鐵道の警備に死力をつくす一方兵匪の討伐もなすので其の勤務狀態等は到底判斷だに及ばざるものが多い。

一時靜まつて居た安奉線も近來さかんに匪賊の出沒しきりにて列車を射擊したり鐵道線路の修理してゐる保線方を人質として拉致したりして守備隊の廣範圍にわたる警備の手薄をねらつてゐることは多いがすべては匪賊の失敗に歸してゐる。

晝夜數回潛伏斥候や線路巡察を出して警戒におこたらない又列車には常に武裝した四五名の守備兵が警乘してその安全を期してゐる。露國や支那の鐵道にも軍隊は置いてあるが我軍のやうな警戒は行つてゐないので旅行者は馬賊の襲擊をうけて身柄だけよろ〳〵放免される有樣である。我が守備兵の在る處將兵の隱れたる努力保護によつて安心して旅行出來るのである。要するに今や獨立守備隊の任務は鐵道守備に止まらず、沿線至る處に出沒する暴戾あくなき匪賊の討伐に日も尙足らざる狀態に活動してゐるのである。

守備專門討伐專門ならば行動簡單であるけれども寡弱な兵力を以てこの兩任務を遂行して行くところに守備隊の苦勞があるのである。

古き國名も高千穗に生れたる信州男の子は男々しくも鄉の譽を己が身に　赤き夕日の滿洲に　ほこをこりつゝ勇み務めぬ

高原に躍る

縣主催青訓天幕講習

八月十九日　第二日の記

K　K　生

第二日の記　長野縣主催

不寢番の靴の音も睡そうに、起伏する各幕舍からは所員の夢も安らかに明けるを惜しむかの如く結ばれてゐる。こゝ、四時半、黎明の光微に漂ひそめた高原の靜寂を破るりゆうれいようたる起床喇叭の響き、夢を破りて直ちに舍外に整列日朝点呼かくてキャンプ第二日の活動の幕は打ち開かれたのだ。仰げば風越の峰が朝霧につゝまれて黑く聳ゆ。

二十六の幕舍より集まれる九百七十余人の健兒は高臺に登り、小笠原大尉指揮の下に國旗揭揚式を行ふ。壯嚴なる「君が代」につれて肅々と昇る國旗に、自然の靈氣を身にうけて、若き魂をおどらせる更に東方に向い遙拜を行ふ。漸く黎明の色濃く動き赤石連峰に紅の雲が燃る。合同体操を一同元氣のよい聲で終る。こゝに於て一日の自主自律、協同友愛、質實剛健の指導精神によりて行はれる講習の命令が下る。洗顏、朝食と手早く片つけられる。炊事勤務員より飯ごうを渡され、亦軍隊より持ち來たれるバケツの樣なお汁入れを一小隊に一ケづゝ渡される。味噌汁だ、油揚と玉葱が浮いてゐる。折しも食事喇叭のカッコメの音が樂しく響く。こわい飯、やわい飯一小隊三十余名の所員が暑い汁をかけつゝ笑い興じて食べる美味さ。

八時半より陸軍中尉中原謹司氏の信州鄉土史の講演始まる漸く暑くなる露天に於ける講演に上服もぬぐ事を許されづ汗を拭いつゝ聽講す。

更に岡田講師の修身講話あり兩講師共、共產主義の誤謬と皇道主道の徹底、皇國青年の重大使命を力說せらる。

蒸さるゝ如き暑さの中を十一時迄、その上催淚性の毒ガスを頂戴する。その威力たるや容器より三尺程の白煙立と見るや九百健兒皆一齊に喰を手拭でおゝふ。白煙は益々昇る汗の頰に毒ガスがひり〳〵としみる。

解散の命令一下道なき坂をとび下り、やつと苦るしみから脫する事が出來た。目からはしばらく涙が出た。

晝食、これも露天なので火の中から蒸氣の中に移た樣なものだ。暑い汁をすゝれば顏からも、首からも汗が盛に落る晝食には豚肉が入つてゐる、軍隊の味噌汁もなか〳〵美味い。

小憩、傍にプールがあるのに水泳は許されぬ。殘念だが仕方がない。

十四師團長小杉中將閣下の閲兵あり。雜用をすませ四時大隊行軍に移る。

鼎村から飯田町を通り長姫神社參拜の大行進だ。

四十余の青訓所が各々所旗を先頭にガッチリと四列に隊を扼み一絲亂れぬ統制の下に歩調をそろへて、村から町へ物凄いばかりの大行軍だ。ザック、ザック初秋の空に力强く響く行進の譜。

青訓の大示威運動だ。

今こそ健兒、九百、魂と魂とを結びあつて、向上の一路を邁に辿らんとする。

若き日本の姿なのだ。

背後に炎々と燃える八月の太陽の如き意氣のもとに。

××××

カフエーに白粉、ネオンサインにペエブメントにやうやく享樂都市化せんとする飯田の眞中をそれは亦なんと云ふ反逆だ。飾り氣の無い菜葉服汗とほこりに日燒けした顏。長姫神社に到り、在滿同胞の武運長久を祈る。

歸路暮色迫まる風越山麓に於て壯烈なる夜間演習を行ひ輝く星を仰ぎつゝ、元氣よく幕舍に歸る。

八時よりキャンプワイヤー。燃え盛る焰を圍んだ健兒の顏に赤い焰が美くしく映る。各中隊からとびだす鄉土民謠の踊り、レコード、所感、音樂等々嚴しき講習に樂しき爆笑が湧く、他郡の所員の踊り上手なのには大變感心する。純眞な集ひ、樂しき團欒、にキャンプの夜は更けて行く。

一所員記

養蠶日誌
一部八錢
又時
新生堂

時又港
御料理
富士松
電話十五番

靴●靴●靴・靴・靴
御注文の製靴は親切・丁寧・堅牢に…値段は正直に大勉强…
修理の御相談は先づ第一に!!
時又港
佐々木製靴店